

白峰村赤谷川流域における出作り地名と自然条件について

岩田 憲二 石川県白山自然保護センター
山口 一男 白峰村桑島物産館

THE PLACE NAMES OF TEMPORARY HABITATIONS FOR CULTIVATION AND THE NATURAL CONDITION IN THE AKADAN RIVER

Kenji IWATA, *Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa*
Ichio YAMAGUCHI, *Shiramine-mura, Ishikawa*

1 はじめに

白山麓の地名調査については、これまで千葉（1974、1975、1979）により吉野谷、白峰、尾口各村の小地名調査が行なわれた。この中で千葉は、当該村域を含む1/25,000地形図上に、採集した小地名を記載し、主に出作り地の地名について考察を行なった。出作り地の地名については、尾口・吉野谷村では自然条件に、白峰村では人名（屋号名）に、それぞれ由来する傾向があると指摘されている。

今回の調査では、人名由来の出作り地名を更に分析するために、調査対象地域を手取川支流の赤谷川流域に絞った。赤谷川流域は行政的には白峰村字桑島地内にあり、昭和30年代前半には二十数戸の出作り小屋（季節出作りのみ）があった。しかしながら、近年の急激な過疎化のために、赤谷川流域では現在3戸の出作り従事者が居るにすぎず、しかもいずれも高齢者である。このままでは、これまで伝えられた地名が消えてしまう可能性があることもあって、人名に由来する出作り地名を中心に小地名を採集した。調査に際しては、現在赤谷川流域で出作り小屋に居住する古老が記憶している地名を1/5,000森林基本図を対照しながら採集した。同時に、採集地名の内の出作り地について、自然条件を調査し、出作りの立地条件について考察した。

今回の調査に際しては、白峰村字桑島赤谷に在住の織田喜市郎、山口清次、及び同村字下田原の山口清太郎の各氏には貴重な情報をいただいたので、ここで謝する。

なお、赤谷川流域で採集した地名は、出作り地名以外にも種々の地名（谷、淵、峠等）があるが、煩雑さを避けるために、それらは別添地図に記載しなかった。

2 出作り地名の分布と自然条件

赤谷川流域で現在残っている人名地名はほとんどすべてかつての出作り地を示していると考えてよい。その例外は〇〇谷、〇〇淵といった自然条件に人名がかぶさった地名だけであり、〇〇山という人名がかぶさった地名はすべて出作り地名である。

出作り地名の分布は、赤谷川兩岸に分布しているが、特に小赤谷出合より奥の地域に多く分布している。赤谷川は赤谷本流と支流の小赤谷の二水系に分けられ、その合流点の小赤谷出合である。同地より奥は、標高でいうと大体500m以上で、赤谷川流域では標高500m以下で残っている出作り地名は少ない。ここで、1/5,000森林基本図に記入した出作り地名をもとに、出作り地の垂直分布をまとめると表1のようになる。出作り地は全体の80%が標高600~900mに分布し、赤谷川兩岸斜面の中下

部に多い。赤谷での垂直分布を白山周辺地域（石川・福井県側）での出作り小屋の垂直分布と比較すると、分布傾向は大体一致する。白山地域では、大体、標高500～1,500 mがブナ帯（冷温帯落葉広葉樹林帯）となっているが、その下部（500～1,000 m）がかつての出作り地帯となっている。

表1 標高別出作り地名分布数

標高 (m)	出作り地名数	百分率	白山麓の出作りの垂直分布(※)
～500	5	8.1	13.9
500～600	5	8.1	13.8
600～700	15	24.2	27.0
700～800	22	35.5	21.5
800～900	12	19.3	16.1
900～1000	3	4.8	5.7
1000～	0	0	2.0
合計	62	100	100

(※) 田中啓爾・幸田清喜 (1927) 白山山麓に於ける出作り地帯地理学評論 3巻4・5号より

ブナ帯では、ブナを始めトチ、ミズナラ、サワグルミ、ヤマハンノキ等の落葉広葉樹が優占し、人間の生活に役立つ有用樹が多い。燃料用の落葉・落枝、薪炭用原木、林産物（キノコ・山菜・堅果類）、木材加工用原材などが落葉広葉樹林から得られる。また生態的にみると、有用哺乳類、魚類もブナ帯では多数生息できる。例えば、クマ、ウサギ、テン、カモシカ、アナグマや、イワナ、ヤマメ、カジカなどといった、人間にとって利用可能な動物がブナ帯には豊富である。米作に頼らないかつての出作り地の生活は、それら有用動植物の裏付けがあったから可能だったとも考えられる。

赤谷で現在でも出作り生活を送っている古老によると、昭和30年代までの出作り生活は上記の林野産物にかなり依存していたそうである。白山麓全体で考えてもブナ帯下部の標高600～900 mの間に、出作り地名が多く存在するものも当然と考えられる。標高1,000 m以上の場所で出作りが少ないのは、一つには作物栽培上の条件によるものであったが、もう一つには、明治以後国有林に編入されたせいでもある。従って、標高1,000 m付近が「作りざかい」となったわけである。

さて、こうした出作り地の自然条件としては標高の他にも、斜面方位、傾斜という大切な条件がある。斜面方位は、出作り地が含まれる斜面の日照時間の大小を決定するから、当然、作物の生育条件は影響を受ける。白峰村では、日あたりのよいところをヒナタ、日あたりの悪いところをオンジと呼んでおり、赤谷川流域において日向（南斜面）、おんじ平（北西斜面）という地名（いずれも小赤谷水系）が残っている。表2は、赤谷の出作り地名を含む斜面の方位を示したもので、ヒナタに分類されるSE、Sはやはり多く、全体の半数を占める。赤谷水系の流れは、SW→NE方向となっているため、大体において左岸がヒナタとなり右岸がオンジとなっている。可耕地が限られているために、オンジのN、NE斜面にもある程度出作り地が分布し、SW、NE斜面の出作り地は極端に少ない。出作り地と斜面方位の関係を考えるうえで重要なのは、その地域の中心河川の流れる方向、つまり谷の方向である。谷の方向が東西なら、当然北岸（つまり南斜面）により多くの出作り地が分布し、谷が南北方向に走っていれば、どちらかといえば西岸（つまり東斜面）により多くの出作り地が分布して

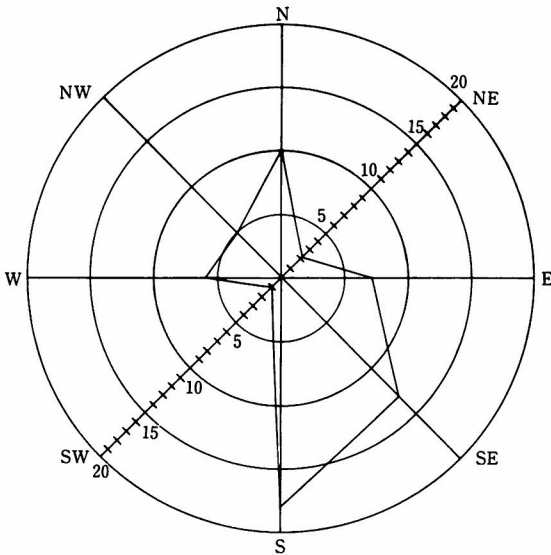


図1 斜面方位別の出作り地名分布数

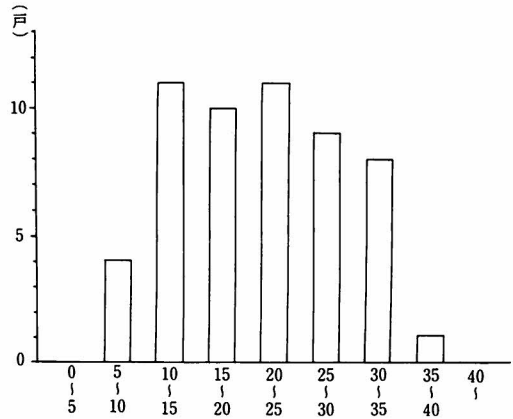


図2 傾斜別出作り地名分布数

いると考えられる。

出作り地の自然条件のもう一つの要素は、斜面の傾斜である。ただ、傾斜の測定では正確さを期すことができないという欠点がある。つまり、何をもって出作り地を代表する傾斜とするかということを決めるのが難しい。出作り地の土地利用を大まかに分類すると、宅地（出作り小屋）、畑地（キャーチとむつしの2種）の計3種に分類できる。ここでは、むつしの上限から畑地の下限まで、つまり、マップ（斜面上部で急崖になっている所）からハマ（川ふちの急崖）までの斜面を、1/5,000 森林基本図上で測り、これをもって出作り地を代表する傾斜とした。測定した傾斜をまとめると表3のようになるが、標高、方位を調査した62ヶ所の出作り地すべてを測定したわけではない。上下左右方向の境界が明瞭な出作り地54ヶ所を選んだ。一般に、出作り地の上下の境界は分水嶺から川まで、左右は尾根から尾根までの、自然境界となっている場合が多い。このようにして測定した傾斜を5度ずつの段階に区切って整理すると、出作り地は10度から35度まで平均に分布し、この間の傾斜なら出作り地の立地はそれほど制約を受けないと考えられる。もちろん、出作り地の中では出作り小屋やキャーチ（常畑）は平坦地でなくては立地できないから、ここでいう傾斜とは実質的にむつしの傾斜と考えてよい。従って表3から考察するむつしの限界、つまり焼畑耕作の限界は35度から40度くらいと考えられる。これ以上になると、農耕技術的に困難なこともさることながら、急傾斜のために土壌が流され岩盤が露出するという地質的な限界がある。以上の理由から、赤谷川流域だけでなく全国的にみても35度から40度が焼畑耕作の限界だったと思われる。

3 ま と め

今回の地名調査は、当初は、地名の採集と整理が目的であったが、千葉（1974, 1975, 1979）の入念な調査により概に大部分の地名が採集されている。そこで、人名地名として残っているかつての出作り地と自然条件の関係を中心に分析した。問題としては、調査サンプルが62ヶ所と少ないこと、及び、調査対象地域が赤谷川流域だけであり狭すぎたことがある。しかしながら、出作り地の立地条件自体は白峰村内でそれほど大きな変動はないので、上記の欠点も克服できたと思う。

今後の課題としては、むつし選定の際の条件を科学的にデータ整理すること、及びその条件と作物の収量との関係を明らかにすることである。今回は触れなかったが、ジョウデン(収量の高いむつし)、ハクデン(収量の低いむつし)という呼び方をされるむつしのそれぞれの自然条件(地形、植生、地質)の違いを明らかにすることも重要である。

いずれにせよ、かつての出作り経験者及び現在の出作り従事者は高齢化しつつあるので、出作りや焼畑の調査は早急に行なうことが望まれる。

文 献

- 千葉徳爾(1974)白山麓吉野谷村における小地名の採集について、石川県白山自然保護センター研究報告第1集, 18—20, 石川県
- (1975)白峰村の小地名——特に出作り地名について——, 石川県白山自然保護センター研究報告第2集, 143—144, 石川県
- (1979)白山麓尾口村域の小地名, 石川県白山自然保護センター研究報告第五集, 159—162, 石川県

Summary

In the catchment area of the Akadan river, a branch of the Tedoru, authors surveyed the place names of Dezukuris (temporary habitation for cultivation) and natural conditions of their locations. More than 60 place names derived from the peculiar family's names could be got from old people living there by interview. Altitude, compass direction of slopes, and gradient of slopes are three main factors determining the location of Dezukuri. Of all Dezukuris, 80% distribute vertically between 600 and 900 meters above the sea level, 50% face south or southeast, and most of them locate in the slopes from 10° to 35°.